

福澤諭吉 (1834-1901)

福澤諭吉は、近代思想を紹介した啓蒙家であり、ジャーナリストであり、慶應義塾を主宰した教育者でもあった。安政2年(1855)に適塾に入門し翌々年に塾頭となる。同5年には江戸の築地鉄砲洲で蘭学塾を開いた。これが慶應義塾の起源である。翌年の横浜見物で英語の必要性を痛感し独習を始め、万延元～慶応3年(1860-67)には幕府の遣欧米使節に参加した。慶応年間(1865-68)から執筆活動を本格化させ『西洋事情』(1866-1870)や『西洋衣食住』(1867)を刊行する。

明治維新後は生涯官職につかず、在野で教育・出版に従事した。『学問のすゝめ』(1872-76)や『文明論之概略』(1875)を執筆し、人心を「文明」に導こうとした。



文久2年(1862年)、パリのフランス国立自然史博物館にて撮影
東京大学史料編纂所蔵



万延元年(1860)、サンフランシスコにて
慶應義塾福澤研究センター蔵



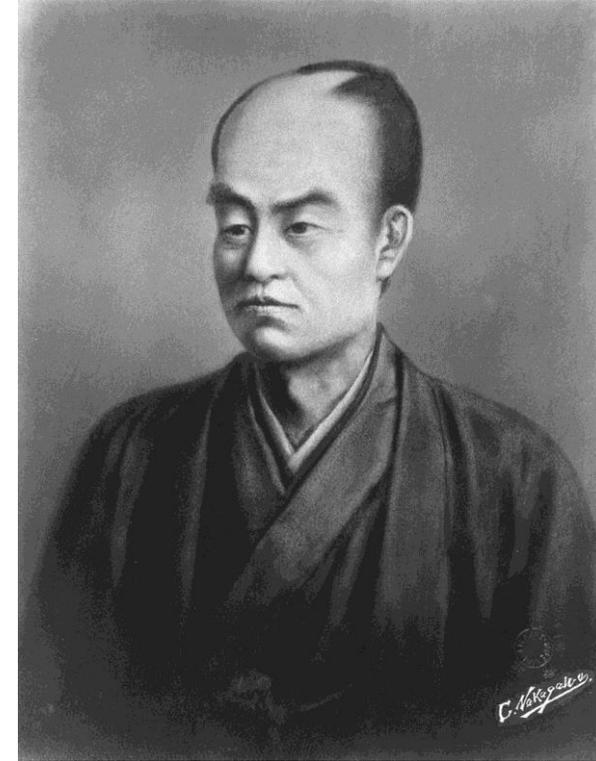
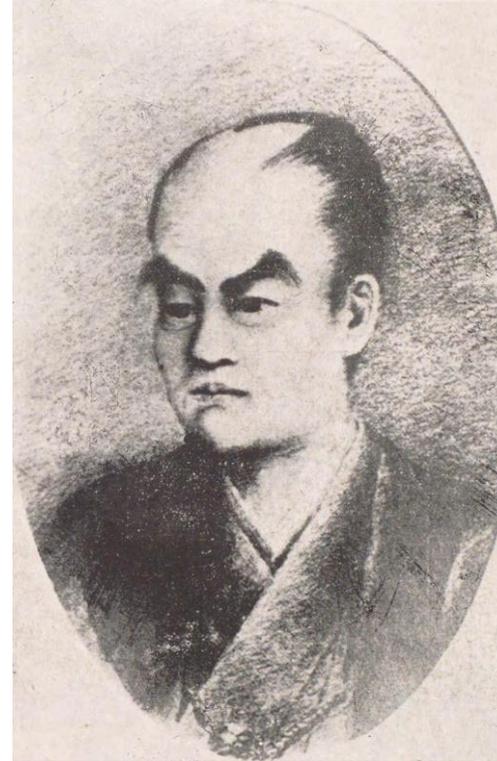
文久2年(1862)
慶應義塾福澤研究センター蔵

大村益次郎（村田蔵六） 1824/1825～1869

大村益次郎は、周防国吉敷郡鑄銭司村（現山口市鑄銭司）の町医師の長男として生まれ、母の実家を継いではじめは村田良庵と名乗った。

梅田幽斎に学んだ後、弘化3年（1846）適塾に入門し、長崎遊学を経て再入塾して嘉永2年（1849）に塾頭となる。同6年（1853）年宇和島藩に出仕し、蘭学の教授を行うとともに軍政改革に参画。その後講武所教授として幕府に出仕。万延元（1860）年萩藩雇士となる。第2次長州征討には石州口軍事参謀として活躍し、休戦後も藩の軍制改革を進めた。

慶応4年（1868）2月から新政府に出仕した。同年正月から始まった戊辰戦争では、上野戦争（新政府軍と旧幕臣で結成された彰義隊の戦争）で軍事指揮を執り、戦争終結に導いた。明治2年（1869）に兵部大輔に就任し、近代的兵制の確立等の軍制改革に着手したが、9月に京都で襲われ重傷を負い、治療の甲斐なく志半ばで亡くなる。



大村益次郎先生伝記刊行会編『大村益次郎』（肇書房、1944年）より

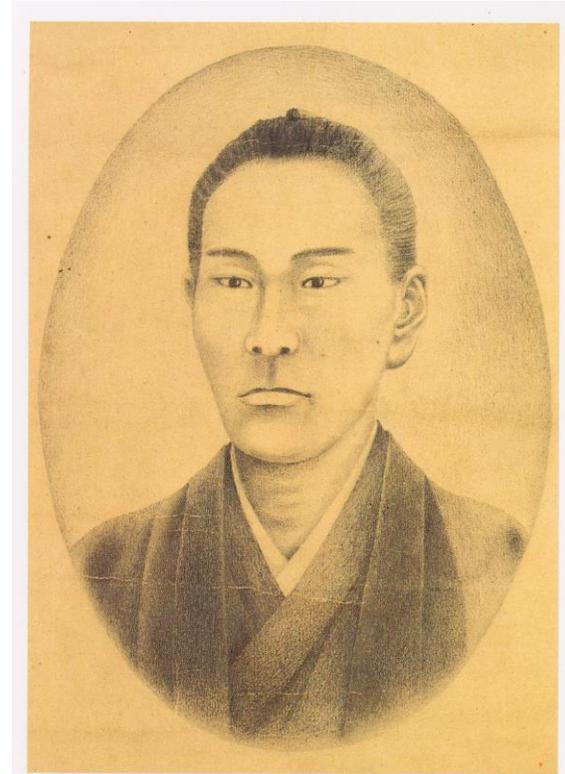
橋本左内(1834-1859)

橋本左内は福井藩奥外科医・橋本長綱の長男として生まれ、15歳で五徳目を掲げた『啓発録』を著すなど早くから才能を発揮した。翌年に適塾に入門し、在塾中は深夜に乞食小舎に出かけ実地医療の研鑽を積んだとの逸話が残っている。嘉永5年(1852)、藩命により帰郷し、種痘事業に出精した。安政元年(1853)に江戸へ遊学し、坪井信良・杉田成卿・戸塚静海らから蘭学を学び、洋学一般の知識を深めていった。

同4年には春嶽が薩摩藩主・島津斉彬とともに一橋慶喜擁立を計画した将軍継嗣問題の中心的役割を担い、慶喜の下で幕政改革を行い、外国貿易を盛んにして富国強兵を目指す開国論を説いた。しかし紀州藩主・徳川慶福擁立派の井伊直弼が大老に就任して反対派を弾圧した安政の大獄により、同6年に刑死した。



国立国会図書館 近代日本人の肖像



佐々木長淳筆 橋本景岳肖像画(肖像部分)

長与専齋 (1838-1902)

長与専齋は近代日本の衛生行政・医療制度を整備した。肥前大村藩医の養子であった専齋は安政元年(1854)に適塾に入門し、同5年から塾頭を務めた。その後、長崎でポンペ、ボードインについて蘭医学を学んだ。明治4年(1871)岩倉遣欧使節団に随行して医学教育・医師制度を調査し、初代内務省衛生局長として医制の制定、医師・薬舗の開業試験制度の発足、防疫・検疫制度の導入、東京司薬場・牛痘種継所の創設に携わった。明治16年(1883)、大日本私立衛生会をおこして衛生設備および衛生思想の普及に努めた。



国立国会図書館 近代日本人の肖像

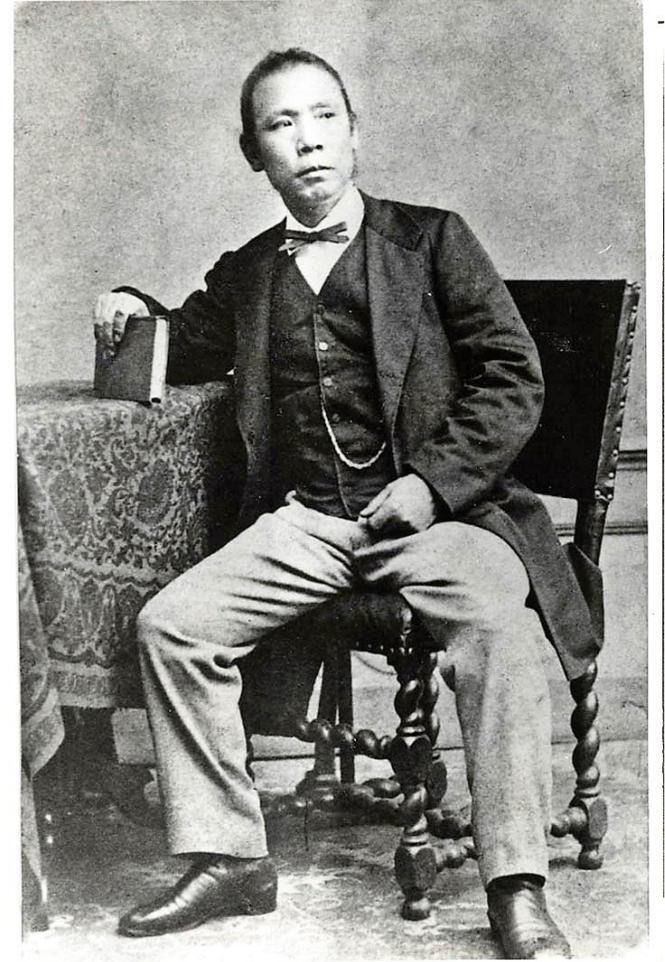


佐野常民(1822-1902)

佐野常民は日本赤十字社の前身博愛社を創始した。佐賀藩士の子に生まれ同藩医佐野常徴の養子となった常民は、藩校弘道館を経て江戸の古賀侗庵、大坂の緒方洪庵、京都の広瀬元恭に学んだ。その後、佐賀藩の理化学研究所である精錬方で主任を務め、長崎海軍伝習所でも学び、佐賀藩の三重津海軍所で国産初の蒸気船「凌風丸」を完成させた。慶応3年(1867)のパリ万博に派遣され、赤十字の活動を知り、明治10年(1877)の西南戦争の際に博愛社を設立した。博愛社は同20年に日本赤十字社と名称を変更し、常民が初代社長となった。



国立国会図書館 近代日本人の肖像



日本赤十字社蔵

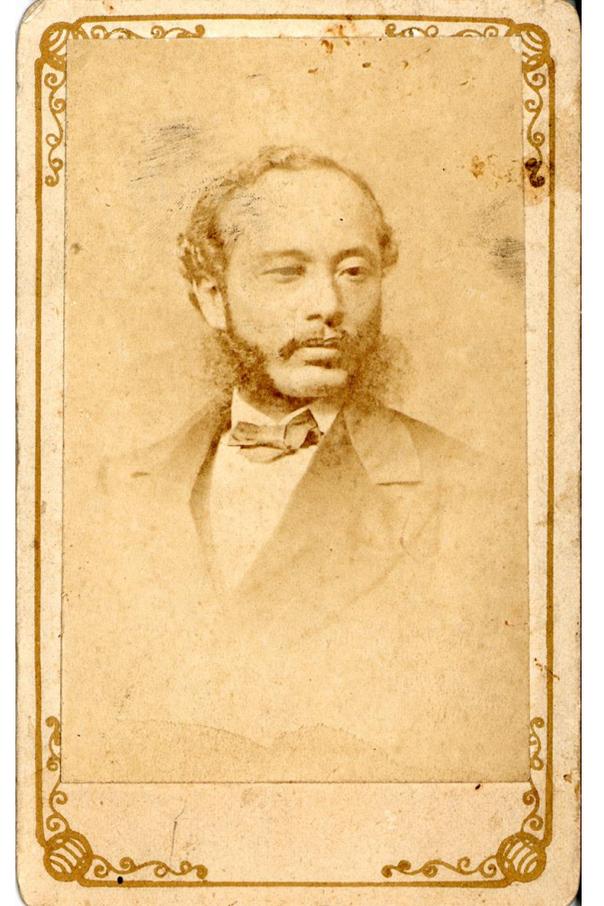
大鳥圭介 (1833-1911)

大鳥圭介は、播磨国赤穂郡細念村(現兵庫県上郡町)に生まれ、岡山藩の閑谷学校で漢学、適塾で蘭学、江川塾で西洋砲術を学んだ。慶応2年(1866)からは幕臣となって洋式訓練に当たり、同4年には歩兵奉行に進んだ。この年に勃発した戊辰戦争では主戦論を唱え、榎本武揚とともに箱館五稜郭で最後まで抵抗し、一時投獄される。

明治5年から政府に出仕し、2年間開拓使としてアメリカを視察、石油・鉄・石炭開発を政府に提言する。その後、工部大学校長、元老院議官等を経て、同19年から学習院長となり、産業・科学技術の面で活躍した。同22年には公使として清国に赴任し、日清戦争開戦の端をつくるなどした。



[書写者不明]『幕末名家寫真集. 第[1]集』



函館市中央図書館蔵

花房義質 (1842-1917)

岡山藩士花房端連の長男。蘭学や洋式兵操を学んだあと、万延元年（1860）適塾に入門する。桜田門外の変で高橋太一郎父子が大坂に逃れ、幕吏に追われ、天王寺で自刃するのを目撃し、事件の発端となった外交の重要性を認識したという。

文久元年（1861）岡山藩大坂詰大砲方に任ぜられ、慶応3年（1867）には欧米を視察し、帰国後、明治2年（1869）外務省の創立により外務大録となり、5年外務大丞に累進。その間清国、朝鮮に差遣され、日清修好条規締結交渉や、朝鮮国との修交交渉にあたる。

以後、公使として朝鮮、ロシアとの外交に従事。20年農商務次官、21年宮中顧問官、24年宮内次官、44年枢密顧問官を歴任。大正元（1912）年日本赤十字社長となる。子爵。



明治6年ロシアにて



写真上二枚
武田勝蔵『明治十五年朝鮮事変と花房公使』（開明堂、1929年）
<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/557/>からダウンロード

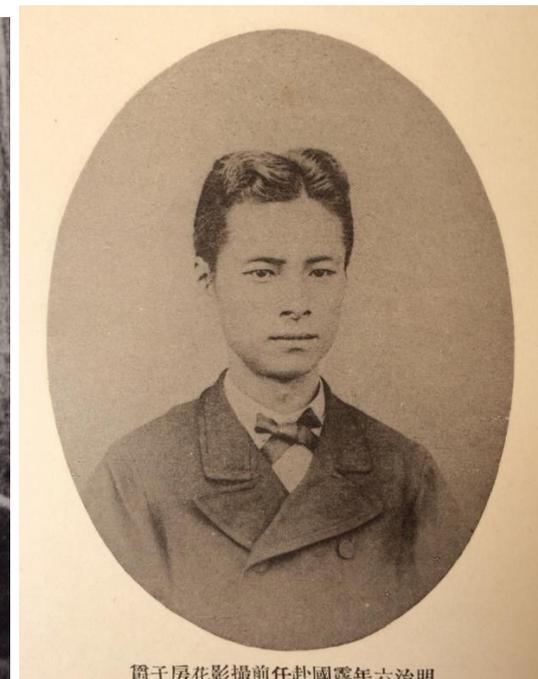
下3枚写真
黒瀬義門編『花房義質君事略』（小林武之助、1913年）



明治元年アメリカ（ボストン）遊学中



明治初年



藩子房花影撮前赴國露年六治明

明治6年ロシア赴任前

高松凌雲 (1836-1916)

高松凌雲は、筑後国御原郡古飯村の庄屋の家に生まれる。幼名を権平といい、のちに莊三郎、さらに凌雲と改めた。文久元年(1861)に適塾に入門したが、翌年に洪庵が江戸に招聘されたため、横浜に出てヘボンに学んだ。戊辰戦争では旧幕府方として従軍し、五稜郭の戦いで敵味方の区別なく治療を行ったことから、日本における赤十字思想の最初の実践者とされる。

明治 12年(1879)、貧民救療事業を行う同愛社を創立し、日本で初期の民間社会事業に努めた。黒澤明監督作品「赤ひげ」のモデルとなったことでも知られる。



日本史籍協会編『高松凌雲翁経歴
談・函館戦争史料』 東京大学出版会、
2016 年より転載



松戸市戸定歴史館蔵
みなみ北海道最後の武士達の物語に掲載あり
[http://boshin150-
minamihokkaido.com/mononofu/takamatsu_
ryoun/](http://boshin150-minamihokkaido.com/mononofu/takamatsu_ryoun/)

手塚良庵（不明～1877）

享和元年生まれ。祖父、父は、常陸府中松平家に仕える医師。安政2年（1855）、適塾に入門する。安政5年（1858）、江戸お玉ヶ池の種痘所設立に協力。文久2年

（1862）に父良仙がなくなり、良庵は良仙と名乗る。同年、洪庵とともに種痘を実施し、医学所入門許可に立ち合った。文久3年には、歩兵屯所医師となる。

明治3年（1870）、軍医寮二等軍医服となり、昇進し、同5年には、正七位に叙せられる。同10年、陸軍軍医として西南戦争に従軍。赤痢にかかり同年10月10日死去。77歳。その生涯は、曾孫の手塚治虫によって「陽だまりの樹」としてえがかれた。



明治9年6月10日洪庵第14回忌記念写真



手塚治虫『陽だまりの樹』